

新編 歴史文庫 8

太陽のない街

中村 青史

## 熊本が培った労働者作家

生涯の憤りをうち込

んだ「太陽のない街」

のない街」であった。

太陽は、山から山へかくれ

んぼした。

「谷底の街」は事実「太陽

この「太陽のない街」の作者徳永直は真正正銘、熊本の風土が生んだ作家なのです。労働者に読んでもらう小説は、労働者作家のものでなければならぬ。——そんな意気込みとエネルギーは、若き日に熊本で培われたものです。保守同志の政争に明け暮れたと言われている大正期の熊本で、このような労働者意識については不毛の地であったらうと考えられがちです。しかし、本当はこのような労働者作家を生み育てていました。田舎からポツと出の若者が、いきなり大工場の労働争議の指導者になり得たりするでしょうか。そしてまた、首切られるとすぐにあの有名な小説を書き得たでしょうか。これには出京前の熊本での徳永直の生活史は見逃せないのです。

「太陽のない街」は、文字どおり陽の当たらない労働

者の苦しみと悲しみと憤りと抗議とを描いたものですが、新潮文庫本あとがき（岩上順一）のことは借りますと、作者徳永直の「ひとこと」でいえば労働者としての三十年の苦しい生涯の悲しみと憤りと抗議とをこの作品のなかにうちこまずにはいられないという気持であった」といっただころなのです。

大正一五年（一九二六）の一月、東京の共同印刷で三八名の労働者がクビになったのを発端に、七〇日間余りもストが続く大労働争議が始まりました。印刷資本家側は他の財閥のバックアップのもと、警察、暴力団、ブルジョア思想団体、宗教団体等を動員して、革命的な労働組合をつぶそうとしました。これに対し組合側も総力をあげて対抗。つまり労働者と資本家の総力戦となったのです。戦後では三池争議が同じように労資の総力戦と言われていますが、これにおとらない激しい戦いであったのです。

この争議を素材に「太陽のない街」は書かれています。普通の小説と違ってドキュメントタッチで描かれています。しかも主人公と思える者がいない。強いてあげるなら萩村という青年と高枝という女性が多く場面

願を出しますが、必ずしも主人公とは言えない。基本的には労働運動にヒーローやヒロインは不要ということ、その場面その場面で、それぞれ主人公が登場するしくみです。この作品が発表されてもない昭和五年（一九三〇）『プロレタリア芸術教程』という本に「太陽のない街」はいかにして製作されたか」という徳永の文章があります。それによると、労働大衆は、決してインテリ諸君のやうに利巧ではない。彼等は深く根掘り、葉掘りに考へるだけの精力を失つてゐる、精力を搾取されてしまつてゐる。ひどく陰気な生活の中で陽気な生活をあこがれてゐる。彼等は動的である。考へるよりも当つてくだけろである。高遠なる理想よりも、具体化された現実の一事実に全力を傾けつくす。だから、やさしい語句で、自然な感情で、単純にその境地へ引き込んで、泣いたり、笑はしたりさしてくれるものでなければならぬ」といっています。

### 家族のために書く

#### …多喜二との比較

日本の文学者の中で、徳永ほど貧しい労働者出身の作家はほかに見当たりません。徳永直とよく比較される作家に小林多喜二がいます。「太陽

そこに勤めに行く主人公に、母親は、むりせんでもえ、が、五円づつは送ってくれや」と頼みます。定収入のない父親のもとに弟妹五人、そんな家族の大黒柱的位置に立されていたわけです。その後、労働運動にかかわって熊本で職を追われた徳永が、東京へ出て行くのも家計を支えるためであったのです。上京の翌年、徳永は結婚し、子どもも昭和八年には三人生まれています。小林多喜二が主義を貫きプロレタリア文学に殉じたのに比べられて、あるいは卑怯もの呼ばわりされつつも、書き続けなければ家族の口を糊することのできなかつた事情を、冷酷に批判する冷めた目を私は持ち合わせません。

### 体験作家、転向

#### 後も熊本が登場

徳永は昭和一〇年（一九三五）三六歳のとき神経衰弱がひどくなり、青山脳病院や東大病院で治療を受けることとなります。その青山脳病院長は杏藤茂吉で、彼の日記にも徳永直と話したことが記されています。ノイローゼの原因はなにか、それはまさに転向問題なのです。はっきりと転向を声明したのは昭和一二年で、「太陽のない街」を絶版する旨、新潮社に申し入れ、読売新聞のインタビューに答えて声明を出した時となつ

のない街」が林房雄を介して「戦旗」というプロレタリア文学の代表雑誌に持ち込まれたとき、ちょうど小林の「蟹工船」がその「戦旗」に連載されていたこともあって、二人はよく並べられるのです。しかし、生い立ちの貧しさの度合い、学歴、家族構成など大きく異なります。

一例として両者の賃金を比べてみましょう。小林多喜二には彼を上級学校にやってくれる叔父がいました。で、小林は小樽高等商業学校を卒業して銀行に勤めるサラリーマンになるのです（大正一三年、二二歳初任給七〇円）。その銀行をクビになった昭和四年（一九二九）二六歳のときの月給が一〇〇円だったと言います。徳永は大正一一年、二三歳のとき上京して最初民友社の植字工になりましたが、このときの日給は二円六〇銭です。やがて博文館印刷所（のちの共同印刷）に転職しますが、実技テストで最高の成績を出して日給三円をとるようになります。一カ月休みなしに働いても九〇円です。実質は二四、五日分でしようから八〇円の月給がせい一ぱいというところでしょう。立野の発電所に臨時工で勤めに出たときのことを書いた作品「黎明期」（昭和一〇年）があります。が、その舞台となった時期は上京の三年ほど前ですが、

ていますが、実際は昭和九、一〇年に一番苦しんだようです。転向を弁解した作品として悪評高い「冬枯れ」（昭和九年）も、もう少し角度を変えて評価できる作品だと思っています。確かに「太陽のない街」とその一連の作品がもっていた対権力、革命的使命感といった傾向は消えています。

ところが、この「冬枯れ」は「黎明期」とともに熊本時代における労働者、労働運動家徳永直をふり返る作品の嚆矢でもあったわけです。これらの作品が、おぼろげながらも熊本での若き徳永直像をわたしたちに伝えてくれることになるのです。いわゆる転向後の傑作「最初の記憶」（昭和一三年）は、熊本での幼い時の労働体験を水晶のような文章で綴ったものですが、「太陽のない街」を書く以前にも、熊本での労働体験や貧困体験を作品化したのが三つあります。大正一四年の「馬」「戦争雑記」「あまり者」がそれです。また戦後も「白い道」に代表されるような熊本のことを書いた作品がありますし、一般的転向者のように、転向後にとくに郷里回想の私小説を書いたのではなく、徳永の体質の中にもともとそんなものを秘めていたといつていいのかも知れません。

小林多喜二の手法は文献や資料を駆使して彼の思想を作品化したものといえます。「蟹工船」を書くにも実際に蟹工船に乗り組んでいて書いたのではなく、蟹工船の船員から話を聞いたたり、関係資料を調べて書いているのです。その点、徳永は自分の体験を綴っていく性質の作家です。そしてまた、彼には彼の体験をいくら書いても書き尽せないほど豊かな体験をもっていたのです。ただ、労働者から作家に転身した彼には、労働争議の材料はそろそろ底をついてきていたようですが、とにかく「太陽のない街」を支えている労働者意識も、熊本での二三歳までの労働体験を抜きにしては考えられないのです。そして、その熊本での体験のもつ弱点もまたそのまま現われていると見てよいでしょう。

### 徳永文学の神髄

#### 「私の素質」と

徳永直ほど労働者大衆を意識していた作家もまた少ないし、労働者作家と自認し、人もそう呼んでいました。

私は或る工場での仲間云はれた「だんだん君はイ  
街」はいろいろと弱さをもっている。

と書っています。この「私の素質」とは何でありましょ  
うか。「郷里熊本で工場仲間と回覧誌をだし」「上京して  
からもいくつか短篇をかいた」それらを青野季吉や金子  
洋文にみてもらったりしている。「ある程度の作家志望者」  
だったことが、一応「私の素質」と考えられます。また  
「自然発生性」とは、労働争議の背景にあった指導者日  
本共産党の実体をくわしく知らず、福本イズムの偏向な  
ども加わって、単なる「労働者気質の無条件是認」によ  
るものというこのようです。しかし、その自己批判とし  
て使われた「私の素質」と「労働者気質」こそは、よ  
かれあしかれ徳永文学のいわば神髄ではなかったのか。  
そこに熊本でのざっしりした生活体験が横たわっている  
のです。

#### 厳しくやさし

「私の素質」の非常に奥深いところ  
に、母なるものへの回帰がある  
ように思います。徳永文学の特徴

#### い母親の投影

の一つは母親、あるいは母親的なものがよく登場するこ  
とです。「太陽のない街」に出てくる長屋のおかみさんた  
ちは必ずしもここでいう母親ではなく、むしろ、かの高

ンテリ臭くなつてゆくやうだ」と。私は、誰の批評よ  
りもギョツとした。「太陽のない街」は如何にして製  
作されたか)

このように彼の意識は、労働者対資本家としてよりも、  
労働者作家対インテリ作家といった認識の仕方をより強  
く押し出すのです。それは熊本に建てられた文学碑碑文  
にもとられた「最初の記憶」末尾の

私たちはもつと労働について語らなければならぬ。  
労働のもつ内容は、現在語られている多くの恋愛より  
も、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、ないし  
は消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を  
益するものである。

の中にもよく表れていると思います。それは彼の實際体  
験から得た実感に裏打ちされたたかな主張であり、  
確かにインテリの持っている弱さ、浅薄さを指摘してあ  
まりあるものなのですが、同時に、体験主義が陥り易い  
欠点も持っていたと見るべきでしょう。その欠点に彼が  
気づくのは、昭和二五年（一九五〇）岩波文庫版「太陽  
のない街」解説を書くときではなかったでしょうか。  
私の素質に、その自然発生性もくわえて、「太陽のない

枝にその母親像が感じられます。男勝りの高枝ではあり  
ますが、その妹お加代へのいたわり、やさしき、そして  
その生命を奪うものへの激しい憤り、そんなところに徳  
永の母親を感じます。たとえばこんな表現があります。

——姉さん……

意識が、苦悶の裡に喚び戻されると、お加代は姉を  
呼んで、その手を探しもとめた。土間で覗いていた向  
う長屋の女の子達が泣き出した。

——切つても出して下さい。この娘は、どんなこ  
とがあつても、殺すことは出来ません……。

高枝は噛みつくように、ともすれば冷やかな事務的  
狡猾さのなかに、病人を放擲しようとする医師を睨み  
つけて怒鳴った。

——畜生ッ、この娘を殺したら、富坂署の奴ら、咽  
喉ぶえに、喰いついてやるから、そう思えッ!!

肥った看護婦は、病人の両脚を抑えながら、物凄  
高枝の顔を見て、口を開けたまま、ぼんやりした。

また「最初の記憶」の母親は、徳永の母親の原形とも  
言うべきものでしょう。主人公の少年は、小学校入学前  
から母親に竹箆作りを習います。

最初のうち、ナイフがでんでいうことをきかなかつた。竹肌の上を跳ねあがるかと思えば、こんどは止め度なく斜に喰いこんだ。母に手をとって教えられても、自分の意志とナイフとは別々に生きていた。

「この不器用もんが、その手ば叩切つてくれる——」  
鉈を振りあげると、母は台の上をたたきつけた。真実に叩き切りはしなかったが、私は怖くて跳足で戸外へとびだした。

右手の親指の頭がナイフの形なりに裂けて血が出た。次には左掌の人差指が皮が破れて赤肌になった。しかし親指の頭に纏帯しても、絆創膏を貼つても不可なかつた。それではナイフに神経がかわわなくて、箸はまゝくならないのである。

「ようし、何だこれしき……」

母はたびたび私の掌をとりあげて、指の頭の血をなめてやりながら言った。

「——何度も皮が剥げれば、そのうちもう血が出んことなる——」

このように厭しさとやさしさが表裏をなしている母親は、この後の朝市場に竹箸売りに行った場面でも、「他

での徳永の生涯は、これ労働の明け暮れでしたが、とくに煙草専売局職工時代に知り合った米村鉄三との出合いは彼の労働者氣質に一本、筋を入れたものと考えられます。

徳永の娘婿になる津田孝氏の年譜によりますと、

一九一七年（大正六） 一八歳

眼を決定的にわるくして文撰ができなくなったので熊本煙草専売局の職工となり、ついで熊本電気会社第一発電所（阿蘇山中にある黒川発電所）の職工となる。

この年、ロシア革命がおこる。専売局で知り合った米村鉄三という文学好きの同僚（二三歳年長）から影響を受け、クロポトキンの「青年に訴う」、ラッセルの論文、ソログープの「毒の園」、アルツイパーセフの「労働者セイリオフ」、ゴリキイの「チエルカツシユ」、ドストエフスキーの「死人の家」その他、ゾラ、モーパッサン、イブセンなどよむ。

とあります。「黎明期」という作品には、

煙草工場で知り合った、この博学な労働者は、私にロシア文学をふっこみ、虚無党や、バクニーンを教へ——神聖なる労働——を罵るときはまるで血相を変へた。「神聖なる労働者ち、いったいどやつが云ふたか？」

人の中」（昭和一四年）でも出てきます。「あまり者」（大正一四年）では、陸軍の残飯を売り買いで生計を立てているような貧しいなかで、自分の子どももたくさんあるのに、親なしになった乞食の子どもまで養うこととなる母親が描かれています。「白い道」（昭和二二年）の母親は、長男の三吉が東京へ職を求めて出て行くときに、末の妹をおぶって途中まで送って来ますが、「わしが死んでも、たかい旅費つこうてもどつてこんでもええが、おとっさんが死んだときやあ、もどつてきておくれなア」と言います。

徳永の母親は本当に人間性豊かな人であったようで、彼の「私の素顔」の基本にそれが受け継がれていること、の作品への反映だと思われれます。「太陽のない街」とその一連の作品には、この母なるものは影をひそめているかも知れませんが、徳永の母なるものの甘く哀しい作品に『彼岸』（昭和一一年）や『妻よねむれ』（昭和二二年）のような傑作があります。

#### 一本、筋を入れた

#### 米村との出合い

次に「労働者氣質」ということについてですが、「太陽のない街」で作家的出発をするま

そやつば連れてくるがええ、わしがきいてやる、人間と馬とどっちが働くか!?すると労働者は馬よりも劣つとるか!?」

煙草専売局の私達の工場で、彼は狂人扱ひにされた。

「レーニンは偉大な虚無主義者だ——」

ロシア革命が、K地方の新聞で報道されたとき、私達は煙草倉庫のくらいとところで、運搬車をひっくりかへして腰掛ながら、話し合った。——えらいやつだ、キリストも何も木ツ葉微塵にしてしまつた——。

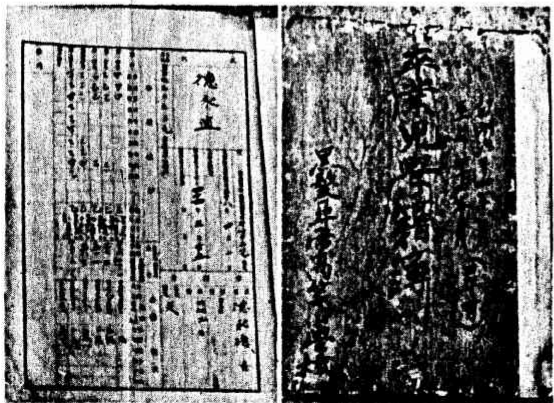
と書かれています。この米村と従兄弟の角田と徳永の三人が出てくる作品は「黎明期」「白い道」「黒い輪」などです。吉田政喜氏（元熊日校関係部長）によると、この三人は大正七年に熊本市青年思想研究会を組織したということですが、徳永直の場合、自筆年譜（昭和三二年）もありませんが、彼の作品の中で語られることが証拠資料として参考にされています。作品には虚構もありますから何でも信用するわけにはいきませんが、たとえば前記の「黎明期」「白い道」「黒い輪」といった作品は、それが書かれた時間には隔りがありますが、舞台上共通点が多く、登場人物もほぼ一致していて、加えたり引いたりす



▶熊本市黒髪一丁目の徳永の旧居跡。  
上京する二三歳まで住んだ



▲昭和28年ごろ、東芝川岸工場の労働者と  
（「一つの歴史」新読書社）



▶黒髪尋常高等小学校のときの学籍簿 五年生のときの修身は甲とみえる

▲「太陽のない街」を執筆後、三〇歳のころの徳永  
（「一つの歴史」新読書社）

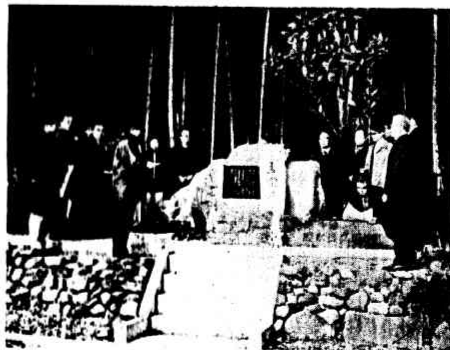


▶「太陽のない街」の表紙



▲徳永直

▼徳永直の著作の一部



▶立田山麓の文学碑前で  
毎年行われる孟宗忌



▲(左から)米村鉄三、徳永直、角田時雄の三人

ると大体真実の姿が浮かんでくるのです。身内の津田孝氏作るところの年譜も、大正六年（一九一七）から一二年までの期間は主に作品から推察されているのではないかと思います。

### 新人会、五高

そこでまた、その年譜を引っぱってきます。

### 生との交流

一九一九年（大正八） 二〇歳

米村鉄三および、従弟にあたる印刷工角田時雄たちと、労働者ばかり、三、四人が中心となって「労働問題演説会」を計画する。ポスターはりをして熊本憲兵隊にかぎつけられ、熊本警察署に検束される。このため黒川發電所を首切られる。このころから労働者としての階級的な自覚が芽生えはじめる。

一九二〇年（大正九） 二二歳

ふたたび九州日日新聞社で文撰工として働く。熊本印刷労働組合創立に参加。第一回熊本メーデーに参加。同年、第五高等学校にきた賀川豊彦を招いて、「労働問題演説会」を開き、自分も演説をする。

一九二二年（大正一〇） 二二歳

長崎県島原町に憲政会系の新聞社が新設され、活字、

に書いています。

小野の上京以来、東京の空が急にせまくなった気がしている。——このうすよごれた町からほとんど出たことのない三吉は、東京を知らないけれど、それまでの東京からはまだ大學生の田門武雄や、卒業して間がない三輪壽藏や、赤松克馬や新人會本部の連中がやってきた。彼らはサンジカリズムないしアナルコサンジカリズムの思想をふりまいてゆき、小野も、三吉も、五高の學生たちも、また専賣局の友愛會支部の連中も、革命が氣分的であるかぎり一致することが出来ていた。ところが東京から「ボル」がいちばやく五高の學生に流れこんでくると、裂けめがおこった。「前衛」とか「種時く人」とか、赤い旗の表紙の雑誌が五高の連中から流れこんでくると、小野のところには「自由」という黒い旗の表紙が流れこんできた。三吉はどっちも讀んだが、よくはわからなかった。わかるのは小野の性格の厭なところが、まるでそこだけつつきだされるように、きわだつて現われてきたことであつた。

とにかく、一九一七年から一九二二年までの熊本における徳永直は、単なる労働者にとどまらず、労働者気

機械とともに雇われて、島原半島にわたる。社長たちボス連の有明湾埋立工事に関する悪事をバクロし、待遇改善、賃上げをスローガンとして二日間のストライキをおこなう。このため暴力団にとりかこまれて、暴力的に船にのせられて追出される。五高の學生たちが新人會熊本支部をつくったとき、これに参加する。

一九二二年（大正十一） 二三歳

熊本で「アカ」ということになって雇ってくれる工場がなくなり、上京して大森の前衛社に一月食客となる。（略）

以上が年譜に見られる「労働者氣質」を培った徳永直の姿であろうと思われます。前記三作品の他、とくに大正一〇年の項は「女の産地」（昭和一〇年）、「海の上」（昭和一五年）といった作品からとられているようです。なお大正九年の項の熊本印刷労働組合というのは熊本印刷技友会が正確な呼び名だと上田稜一氏の指摘があり、氏はまた、「白い道」に出てくる東京前衛社の高島貞喜なる人物は、大森前衛社の高橋貞樹であり、彼は熊本労働団主催によるロシア革命五周年記念講演会に大正一一年に来熊したのだと言っております。「白い道」には次のよう

質”を養い育てつつあつたのだと思います。憲兵を仲間だと感懐いしてひどい目にあう無知というふうか純真というふうか、そんな面も持っていた米村鉄三ではあつたが、徳永にとってはかけがえのない先導者であつたのです。この米村を軸とした「労働者氣質」の塊りが、ロシア革命という時代的刺戟のもとでの五高社研や、新人會熊本支部との交流の中で、「太陽のない街」の土壌を着実に用意していったものと思われます。